令和六年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜　全日制の課程

Ⅱ　国　語

注意事項

1　開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

2　問題は **問五** まであり、1ページから14ページに印刷されています。

3　解答用紙の決められた欄に解答しなさい。

4　文字や数字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れなさい。

5　マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の ◯ の中を塗りつぶしなさい。

6　解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

7　終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受検番号
番

問一　次の問いに答えなさい。

(ア)　次のa～dの各文中の――線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　試合の展開に固唾をのむ。　（1　こすい　2　かただ　3　かたず　4　こじょう）

b　評論家が辛辣な意見を述べる。　（1　しんこく　2　しんそく　3　しんれつ　4　しんらつ）

c　彼は十年に一人の逸材だ。　（1　めんざい　2　ばんざい　3　べんざい　4　いつざい）

d　拙い文章だが思いが伝わった。　（1　はかな　2　つたな　3　しがな　4　せつな）

(イ)　次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　妹が頬をコウチョウさせて走ってきた。

1　時代のチョウリュウに乗る。　2　夕食の準備でホウチョウを使う。

3　天気が回復するチョウコウがある。　4　サンチョウから景色を撮影する。

b　先生が学校のエンカクを説明する。

1　熱中症予防のためエンブンを摂取する。　2　仲間にセイエンを送る。

3　道具の使い方をジッエンする。　4　川のエンガンに住む。

c　税理士のシカクを取る。

1　友人に結婚式のシカイを頼む。　2　新しい会社にトウシする。

3　定期購読しているザッシが届く。　4　自作のシシュウを出版する。

d　友人の気持ちをオしはかる。

1　軽率な行いをハンセイする。　2　姉は歌舞伎にシンスイしている。

3　事態のスイイを見守る。　4　卒業式で校歌をセイショウする。

(ウ)　次の短歌を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

八月のまひる音なき刻（とき）ありて瀑布（ばくふ）のごとくかがやく階段　　真鍋（まなべ）　美恵子（みえこ）

1　八月の昼の盛りに周囲が静まり返る中で、真夏の光をはね返してまぶしくかがやいている階段を見て、激しく流れ落ちる滝が連想されたということを、直喩を用いて表現している。

2　八月の日中に閑散としていた階段が、夜は人々でにぎわい、激しく音を立てる滝のように感じられたということを、時間と状況を順を追って説明することで具体的に表現している。

3　八月の昼間に真夏の暑さをしのごうとして滝を見に行ったところ、激しく音を立てて流れ落ちる様子を見て、大きな階段を思い浮かべたということを、体言止めを用いて表現している。

4　八月の暑さの中、次から次へと降りてくる人々の流れによって、階段が滝のようにかがやき動いて見えたことへの感動を、「かがやく」と平仮名を用いることで強調して表現している。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

> 昭和三十五年、青森県に住む「より子」は結婚することになり、挙式の当日に実家からの荷物を積み込んで、夫となる相手の家へ向かおうとしている。

この辺りでは女の子が生まれると、桐の木を植え、それで嫁入り箪笥を作るのが慣習で、より子の嫁入り道具もそのように調えた。

次々トラックに積み込み、最後に積まれた物を見て、より子は驚いた。

洗濯機である。ローラーに洗濯物をはさんで、ハンドルを回すと脱水された洗濯物がのしいかみたいに出てくるのだ。こんな物を買った覚えはない。

それもそのはず、父がこっそり用意した物だった。

父は炭焼きをやっていたからいつも真っ黒なのだ。焼き上げた炭を萱で編んだ「炭すご」に詰めて、馬に括りつけ里に下ろしていた。

年頃になったより子は真っ黒な父が恥ずかしかった。

学校の終業時間と仕事終わりが重なると、空っぽになった馬を引いて、学校に寄ってくれることがある。父も馬も真っ黒いままだ。校門の前に立つ父を見留めると、より子は「ひぇえ。」と小さな悲鳴を上げてこっそり帰っていた。

父は置き去りにされたのを分かっていたのかいないのか、帰宅すると「おろ、より子は先に帰ってらったのか。」と目を丸くする。おっぴろげた鼻の穴も真っ黒だ。

ある時、こそこそすることが理不尽に思えた。父が真っ黒に汚れているから自分はこそこそと帰らねばならないのだ、と憤る。

「ダダはいつも汚ねくてしょしい。」と罵った。しょしいというのは、恥ずかしい、という意味だ。

1 その時の父の顔をより子は忘れられない。深く傷ついた顔なのに、眉をハの字にして、情けないような笑みを懸命に浮かべていた。

まずいことを言ってしまったとより子はヒヤリとしたが、謝れなかった。

そういうことがあった上での洗濯機なのだろう。亭主に恥ずかしい思いをさせないために。

それが分かっても礼を伝えられないままに、洗濯機は運ばれていった。

嫁入り道具がすべて運び出されると、玄関先で盃を交わす。それがすむと、花嫁と両親、弟の亘以下関係者たちは待っているハイヤー(注)に分乗するのがしきたりだ。

しかし父は、あとから行くと告げて家の前にポツンと残っていた。

怪訝に思ったより子が視線を母に転ずると、母は物言いた気な顔つきをしている。

聞き出したところ、自分は真っ黒でみっともない。だから一緒には行けない。あとから馬で行く、と決めていたそうなのだ。

より子は発車しかけていたハイヤーから降りた。

夏の強い日差しの中に立つ父の輪郭は、何とも曖昧だった。足元の乾いた土にいびつな丸い影ができている。日が明るければ明るいほど、影は濃くなり存在感を増した。それはまるで、父の足元に深い穴があるように見えた。

玄関前に立つ紋付袴の父のもとへ行く。

「馬っこさ乗せてもらってもいい？」

より子の頼みに、父は目を丸くしたし、他の人たちも反対した。みったぐね、と。

みったぐない――。みっともない。ハイヤーがあるじゃないか。馬で嫁入りなど世間体が悪い。

より子は聞かなかった。

父は初めは戸惑っていたものの、白無垢姿で仁王立ちの娘を前にして、ついに折れた。

2 裏の馬小屋から座布団を括りつけた馬を引っ張ってきた父は、戸惑い顔から、はにかみ顔になっていた。

普段は父ともども黒く汚れ、網目状に乾いた泥をお腹や脚にくっつけていた馬は、すっかり磨き上げられていた。栗色の毛が艶々と天鵞絨のようだし、鬣はサラサラと揺れる。薄汚れている時は長い睫毛の下ですまなそうに目を伏せていたが、今日は堂々と真っ直ぐにより子を見つめていた。その瞳は澄み切り、純粋無垢だった。

父が、前に座るよう言う。実際子どもの頃はそうしていたが、より子は父の後ろに横座りになった。

着物のため横座りにならざるを得ない今は、前に座ると自分の顔を見られるし父の顔も見なければならないから。顔を見たら、道中、泣いてしまうかもしれないと思った。今生の別れではないが、それでも籍から抜けるのである。そして、盆と正月くらいしか帰ってこられなくなるのだ。いや、それすらも無理かもしれない。近所に嫁いできた人も泣いていた。だから自分も父の顔を見たら、泣くかもしれない。そんなのはみったぐない。だから、顔を見ることなく向こうまで行ける後ろがいい。

父は無理強いせずに、より子を後ろに乗せて馬の腹を踵で軽く蹴った。

馬はグイッと一歩を踏み出す。

より子は父の脇腹につかまる腕に力を込めた。

青い空をトンビが鳴きながら旋回している。おかしみと悲しみが入り混じった鳴き声が青い空に染み渡っていく。

向かう先の山並みが、霞んで見える。

馬の歩みは力強く、ポクポクとのどかな音を立てる。揺れに身をゆだねる。

リンゴ畑を貫く土の一本道は、乾いて白っちゃけていた。丸太の電信柱は少し傾いている。リンゴの木はびっしりと葉っぱを茂らせ、その下にまだ青い実をたわわにぶら下げている。大きな実にするために、摘果が進められていた。風に乗って、桃の香りもしてくる。

畑と道の境には蚕養のための桑の木が植わっている。小さなぶどうのような黒っぽい実がぎっしり生っていた。学校帰りに友だちと競うように採って食べたものだ。紫色になった舌を見せ合ってよく笑った。甘みも酸味も強かった。

両脇の畑はリンゴ畑から漆の木の畑に変わった。風がよく通るように間隔を空けて植えられた漆の木の畑も、秋になると真っ赤に紅葉して美しいが、うっかり触って自分まで紅葉したかというくらい真っ赤にかぶれたこともあったっけ。あの時は大変だった。臭くてえぐいドクダミ茶をしこたま飲まされたのだ。思い出して、ちょっと笑った。

背後から軽快なラッパの音がした。より子たちが路肩に寄ると、すぐそばをボンネットバスが走り抜けていった。乗客が注目している。より子は手を振った。客や車掌も手を振り返してくれた。その後にオート三輪が続く。ラッパを、拍子をつけて三回鳴らしていった。

日差しは強く、何もかもが日を照り返している。舞い上がった土埃が眩しい。中でも白無垢の自分自身が最も眩しかった。

より子は歩んできた道を振り向いた。なだらかな名久井岳が控えている。

生家がどんどん遠ざかる。
切なくなって視線を落とした。
白い足袋に引っかかる白い草履が、揺れている。その下を、白っちゃけた地面が流れていく。
「ダダ、馬っこは疲れねべか。」
「こいつはぁ丈夫だすけ、大丈夫だ。」
「休まねくていんだべか。」
「なーも、大丈夫だ。」
3「そうかぁ……。」
どんどん流れていく。
父の袴の裾から、下ばきがちらっと見えた。見覚えがある。
それはより子が子どもの頃に刺した菱刺(注)しだった。父にあげたものの、一度もはいているのを見たためしがなかったもの。
当時は上出来だと思っていた縫い目は、今見るとガタガタ。
「やあねえ、なして今、それ、はいてらのよ。」
照れくさくて嬉しくて、どういう顔をしていいのか決めかねる。4やはり父の後ろに座っていてよかった。
「この菱刺しはよぉ、おめがわらしの時に最初に刺したもんだ。特別なもんだ。だすけ特別な日にはくべ、と決めてらった。」
父が足を揺らす。馬が首を上下させた。首に下げた鈴が、いい音を出す。
「そった前から？　我まだ七つくらいだったべ。」
「おめの嫁入り道具の桐箪笥はもっと早ぇど。おめが生まれてすぐに桐ば植えたんだおん。」
親というものはどこまで考えているのだろう。
父の背中は、思ったより大きくないことに気づく。どちらかと言えば小柄なほうだ。そんな父は、真っ黒になってより子たちを養ってくれていた。自分はそんな父を、汚いだの恥ずかしいだのと批判してきたのである。
「ダダ、ごめんね。」
やっと父に謝ることができた。
「何、謝ることがある。」
「我、ダダさひどいこと言ってしまった。」
父は深呼吸する。
「今日はめでてぇ日だ。めでてぇ日に『ごめん』は合わねえよ。」
より子は頷く。
「ありがっとう、ダダ。」
5鼻をぐずぐずさせながら、震える声で言い替えた。やだぁ、泣いでしまったじゃ。我みったぐねえ、と思った。
「泣ぐな泣ぐな。あもこさなる。」(注)
父の声がからかっている。からかいながらも、その声は震えている。
「ダダってばひどい。」
より子は空を仰いで、あっはっはっはと大きな声で思い切り笑った。

（高森　美由紀「藍色ちくちく」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）ハイヤー＝客の申し込みに応じて営業する貸し切り乗用車。
菱刺し＝ここでは、青森県南部地方の伝統的な刺しゅうのこと。
あもこさなる＝青森県の一部の地域で使われている方言で「おばけになる」ということ。

(ア) ――線1「その時の父の顔をより子は忘れられない。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「父」が仕事で汚れた姿を気にしていたことを知らずに、真っ黒な見た目をからかうような言動をしてしまったが、「父」が深く傷ついている様子を見て、自分の振る舞いを恥じているから。
2 学校に「父」が迎えに来ることに対する気恥ずかしさから、本心ではないことを言ってしまったが、必死に傷ついていないふりをする「父」の姿を見て、自分のことを情けなく思っているから。
3 真っ黒に汚れた姿の「父」が学校に来ることを恥ずかしく思うあまり、心ない言葉を浴びせてしまったが、傷ついても無理に笑おうとする「父」の姿を見て、自分の発言を後悔しているから。
4 学校まで迎えに来てくれる「父」に感謝しつつも、周囲の目が気になるため一人で先に帰っていたが、あとから家に戻ってきた「父」の傷ついた顔を見て、自分の行動が許せなくなっているから。

(イ) ――線2「裏の馬小屋から座布団を括りつけた馬を引っ張ってきた父は、戸惑い顔から、はにかみ顔になっていた。」とあるが、そのときの「父」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 父親と一緒に嫁入り先へ向かうと「より子」が言ったことに照れくささを感じながらも、馬の準備を念入りに行ったことで、娘に恥をかかせることはないと安心して晴れやかな気持ちになっている。
2 ハイヤーに乗らないという「より子」の選択を受け入れて馬の準備を整えるうちに、娘が慣例どおりに行動しないことを恥じる気持ちが薄れ、一緒に嫁入り先へ向かうことに嬉しさを感じ始めている。
3 慣例にならわず馬で嫁入りをしたいという「より子」の思いに応じて準備を整えたところ、一緒に嫁入り先へ向かうことができる喜びとともに、白無垢姿の娘と馬に乗る照れくささが込み上げている。
4 馬に乗って嫁入り先へ向かいたいという「より子」が言ったんは受け入れたものの、実際に準備が整うと娘が馬で嫁入りをすることが改めて意識され、恥ずかしさでいっぱいになっている。

(ウ) ――線3「そぅかぁ……。」とあるが、ここでの「より子」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 生まれ育った場所の風景をじっくりと見たことで生家から遠ざかることへの不安が増し、気を紛らわすために馬の話をしてみたものの、ますます気持ちが落ち込んでしまい困惑しているように読む。
2 慣れ親しんだ風景を眺めるうちになつかしい記憶がよみがえってきて、生まれ育った場所を離れることを名残惜しく感じたものの、歩みを止めることはできずに切なさをかみしめているように読む。
3 幼い頃から暮らしてきた場所をじっくりと見渡したことで、自分の人生を見つめ直すとともに故郷にもはや自分の居場所がないことを自覚し、新しい場所で生活するしかないと諦めたように読む。
4 向かう先の山並みが霞んでいるのを見て嫁ぎ先への不安が膨らむ中で、周囲の風景を眺めるうちに自分の故郷のよさに初めて気づき、生まれ育った場所を離れることに疑問を感じているように読む。

(エ) ――線4「やはり父の後ろに座っていてよかった。」とあるが、そのときの「より子」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　上出来とは言えない自分の菱刺しが施された下ばきを、嫁入りの日を選んで「父」が身につけてくれたことに喜びを感じつつも、自分の表情や思いが「父」に知られることを気恥ずかしく思っている。

2　「父」の顔を見て泣いてしまうのが不安で後ろに座ったことで、幼い頃の自分が菱刺しを施した下ばきが偶然見えたため、「父」が下ばきを大切にはき続けていることが分かって嬉しくなっている。

3　幼い頃に自分が菱刺しを施した下ばきを、「父」が嫁入りの日になってやっと身につけてくれたことに対する喜びを、「父」の背中を見つめながら一人で静かに味わえることに満足感を覚えている。

4　嫁入りの日には泣かないと決めていたものの、自分が幼い頃に菱刺しを施した下ばきを「父」がはいているのを見て涙が出てしまったため、自分の顔が「父」から見えないことに安心感を覚えている。

(オ) ――線5「鼻をぐずぐずさせながら、震える声で言い替えた。」とあるが、そのときの「より子」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「父」が自分を大切に育ててくれたことを感じるとともに、自分の幼い頃の発言を「父」が気に留めていなかったことを知って安心し、思わず涙をこぼしながら感謝の言葉を伝えようとしている。

2　「父」とのわだかまりがとけたことに喜びを感じて涙が出てきたが、「父」との別れの時が迫っているため、二人きりでいるうちに自分を許してくれたことへの感謝の思いを伝えようとしている。

3　「父」が謝罪の言葉はふさわしくないと言ったことから、気持ちが通じなかったと勘違いして涙があふれてきたが、せめて自分を育ててくれたことへの感謝の言葉だけでも伝えようとしている。

4　「父」が愛情を込めて精一杯の力で自分を育ててくれたことを改めて実感するとともに、謝りたいという思いを受け止めてもらえたことも感じ、涙ながらに感謝の気持ちを伝えようとしている。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　嫁入り先に向かう「より子」が、目の前に広がる故郷の風景を見て心を和ませ、幼い頃の思い出を「父」とともに振り返る様子を、炭焼きや馬など当時の生活を想像させるものを用いて描いている。

2　結婚のため家を離れることになった「より子」が、結婚祝いで洗濯機を贈られたことをきっかけとして、「父」と再び言葉を交わすようになるまでの過程を、複数の登場人物の視点から描いている。

3　生まれ育った故郷を離れることになった「より子」が、一緒に嫁入り先に向かう「父」から励まされ、結婚生活に対する期待を高めていく様子を、会話以外の場面でも方言を交えて描いている。

4　結婚の日を迎えた「より子」が、嫁入り先に向かう時間を「父」と過ごすことで、我が子を思う親の気持ちの深さを感じ取っていく様子を、故郷の豊かな自然の風景を織り交ぜながら描いている。

問三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ファッションにおけるコミュニケーションとしては、衣服自体を言語コミュニケーションのメディア(注)にしてしまう手法は例外的である。Tシャツにおいても、単純に言語による情報が純粋に交換されているわけではない。たとえば、無地のTシャツよりも、前面に大きく有名ブランドのロゴがプリントされたTシャツの方に価値があるとされる、不思議な傾向がある。ロゴによって品質の保証が周囲にも伝わるという効果があるゆえだが、それだけでなく、そのロゴが模様として認知されたり、単なる名前以上の意味を持つからでもある。これを考えるだけでも、Tシャツに文字をプリントすることが、ただ書かれたままのメッセージを伝えているわけではないことがわかる。

そしてそれらは、文字が書かれているからといって、特別な衣服として着られているのではない。文字が書かれていない衣服と、着られる場所や状況が違うということもない。衣服は言語によるメッセージを伝えるメディアとしては、衣服しか持ち得ないような特徴はあるものの、1本や新聞のように、普遍的な言語コミュニケーションのメディアとして存在しているわけではないのだ。

それに、文字が書かれていようがいまいが、衣服がコミュニケーションの手段であることを、私たちは感覚として知っている。初めて会う人の人となりを理解するのにも、衣服は非常に大きな手がかりになる。私たち自身、時と場合によって着るものを選択し、喜怒哀楽を表明してもいる。

しかしそうすると、疑問が湧いてくる。それではファッションは、言語コミュニケーションと何が違うのだろうか、ということだ。感情やその人の人となりを伝えることができる衣服は、文字を使用しない言語の特殊な一形態であると言い切ってしまってはだめなのだろうか。言語も衣服も、同じように社会的な産物である。両者の間には、どのような違いがあるのだろうか。

人の行うコミュニケーションの形態は、通常、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションに分けられる。ただ実際には、音楽やポスターのように、言語が構成要素の一部を担う非言語コミュニケーションは多いので、明確な境界線は引けない。

それらに比べると、ファッションにおけるコミュニケーションは、文字や音声ではなく衣服や化粧や持ち物などの手段が主なので、非言語コミュニケーションの一つだと、簡単に位置づけられそうだが、ここで問題としているのは、衣服が、形や色の組み合わせによって言語として機能し、意味を伝えうるのではないかという仮説である。つまり衣服は、言語化できない感情や感覚を伝えているのではなく、文字に置き換えることができる情報を別の形で伝えており、習熟すれば正確に読み取ることも、発信することも可能だという考えが、妥当かどうかということだ。

2衣服を言語として考えうるかという論点に対して、もっとも示唆を与えてくれるのは記号論(注)だろう。フランスの思想家ロラン・バルトが、言葉とファッションの関係について鋭い考察を展開しながら『モードの体系』を書いて以来、衣服によって作られる意味世界を、言葉によって解読しようという試みが、数多くなされた。

しかし、ロシアの哲学者ミハイル・バフチンが、「記号の形態は、まず第一に、人びとの社会的組織や、人びとが相互に作用しあう際の身近な条件によって規定されている」と述べているとおり、衣服の意味は、着ている人が所属する社会集団や、あるいは見る人が所属する社会集団によって、まるで異なってしまう。また、ロバート・ロスが指摘しているように、「衣服の文法は他のあらゆる言語の文法よりもはやく変化」するため、それがどんな意味を持つかを確定することはできない。そのため、フィンケルシュタインが警告しているように、「衣服から特定のメッセージを読み、それを誇張するのは簡単」ということも手伝っ

て、ほとんどの分析は、強引な精神分析に飛躍してしまっていたり、ただの美辞麗句になってしまっている。

結局、流行の服の解読を試みたところで、ただ「新しい」という社会的な合意しか見つからないのだ。記号論的な読みをしても、精神分析的な読みをしても、衣服のすべてが解読されることなどないだろう。ロシアの民族学者ピョートル・ボガトゥイリョフは、スロヴァキアの民族衣裳を分析した『衣裳のフォークロア』で、確かに民族衣裳は記号として読むことができるが、民族衣裳と「都会の衣服とは何らの共通性もない」ものであり、「都会の衣服は、すみやかに変化してゆく流行現象に支配されている」ので、民族衣裳を読むようにして現在のファッションを読むことはできないと結論づけている。

にもかかわらず、この衣服にはこういった意味があるという[3]強引な読みは後を絶たない。記号論的な解読は、ファッションに関する批評として最も需要の高いものであり、実際にそういった批評が「人々を楽しませ、ファッションへの関心を高めるために行われている場合が多い」のも事実である。それはそれで知的な娯楽としては面白いが、常に移り変わる意味の一瞬だけを捉えて、それが恒久的な意味であると解説するのは、やはり嘘である。

衣服を使ってのコミュニケーションは、もしそれを活用しようとしても、細かいニュアンスを伝えることができない、意味の変化が早すぎる、広がる範囲が狭すぎるといった不都合に縛られてしまうものだ。［A］伝播していく過程で、発信者が込めた意味は失われ、意味が多様になってしまうので、遠くにいる人々が受け取った時には、もはや内容を検証できなくなっている。いくら言語のようにコミュニケーションを行おうとしても、コントロールしきれないという問題にぶつかってしまうのだ。

このように、ファッションにおけるコミュニケーションは、多層な意味の読みが可能であり、その点では言語と比べると不完全である。もっとも、むしろ同じ対象に、いくつもの意味を読み出せるから、それが次々に意味を変えては、常に「新しいもの」として歴史上に何度も現れ、[4]豊かなコミュニケーションを成立させているという側面はある。

しかし、そうは言っても、やはり衣服は、それだけで意味を持つ単語とは言い難いし、ファッションも、文法の存在する言語の一種とは言い難い。ファッションが言語のように見えるのは、衣服を生産する人たちが、「時代の流儀や規則に支配される倫理的状況と戦略的に連動」させて、言語のように見せているだけという主張には、ある程度の説得力がある。前近代においても、衣服は記号として作用していたとはいえ、言語とは違うシステムであり、言語が交渉の手段であるとすれば、衣服は相手を確認する手段であった。その点は、現在でも基本的に変わらないだろう。

［B］、ファッションが言語コミュニケーションではないと言っても、現在のファッションにおけるコミュニケーションには、テレビや出版物などマスメディアが、不可欠な存在として付随し、視覚的な情報に必ず言葉が添えられる。とはいえマスメディアでは、流行についての解説や評論が、刻々と意味を変えていくファッションの一瞬だけを捕らえて展開されており、そのほとんどは、その言説自体が消費されて跡形もなく消えていく。それを考えると、ファッションにおけるコミュニケーションにおいて、そもそも言語が意味を伝えているのかどうかすら怪しく思えてくる。

だが、ファッションにおけるコミュニケーションが、どのように展開されているかを考えるのであれば、[5]そういった無駄とも思える言語活動を含めたコミュニケーション全体を捉えていく必要がある。言語活動によってはじめて、ファッションは社会とより深い繋がりを持つことができるのだし、思想や芸術や日常生活に対して、提案し、警鐘を鳴らすことができるようになる。そこまでを含んでの、ファッションだろう。

いずれにせよ重要なのは、ファッションがコミュニケーションを成立させているということだ。このことに、異論はないだろう。毎年新しい流行がファッションの世界で起こっているのは、コミュニケーショ

ンが確実に生じている証拠である。

（井上　雅人「ファッションの哲学」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）メディア＝人々の間で意思を伝達できるようにするための手段。
記号論＝あるものごとを別のものに置き換えて表現することによって、対象とするものごとが持つ意味について考える学問。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　A　さらには　　B　ただ　　2　A　そして　　B　あるいは
3　A　なぜなら　　B　やがて　　4　A　しかし　　B　また

(イ) 本文中の〰〰線Ⅰの「の」と同じ意味で用いられている「の」を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　休日に姉の作った料理を食べる。　　2　お気に入りの本を読む。
3　寒いのに上着を忘れた。　　4　降ってきたのは雪だった。

(ウ) 本文中の〰〰線Ⅱの語の対義語として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　獲得　　2　贈答　　3　出費　　4　供給

(エ) ――線1「本や新聞のように、普遍的な言語コミュニケーションのメディアとして存在しているわけではないのだ。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　本や新聞は書かれた文字によって情報が伝達されるが、衣服に文字が書かれている場合は、文字が表すメッセージが衣服から伝わる情報と必ずしも同じであるとは限らないから。
2　本や新聞を初めて読んだ時には書かれている内容が理解できないことがあるが、衣服に書かれている文字を読む際には、初めて会う人に関する情報がわかりやすく伝達されるから。
3　本や新聞は書かれた文字を読むことで情報が伝達されるが、衣服に書かれている文字は、品質を保証するために利用されているに過ぎず、メッセージを伝達する機能はないから。
4　本や新聞は書かれた文字の量によって伝達できる情報量が異なるが、衣服に関しては、文字が書かれているものと書かれていないものとの間に伝達できる情報量の違いはないから。

(オ) ――線2「衣服を言語として考えうるか」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　衣服を文字や音声と組み合わせることによって、衣服だけを用いた場合には伝えることのできない意味を、見る人に読み取らせることができるかということ。
2　通常は衣服同士を組み合わせることで伝達している情報を、文字を書いたり音声を発したりすることによっても、誤解なく表現することができるかということ。
3　さまざまな形や色を持つ衣服同士の組み合わせによって、文字や音声だけでは表現することが不可能な感情や感覚を、正確に伝えることができるかということ。
4　文字や音声に変換することが可能な情報を、さまざまな形や色の衣服を組み合わせることによって、意図したとおりの意味で伝えあうことができるかということ。

(カ) ――線3「強引な読み」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　衣服を解読しようとしても、衣服の意味は社会集団ごとに異なっていることに加え、流行の服は変化が早いため、「新しい」ということ以外に特定の意味を定めることはできないと考えているから。

2　民族衣裳の中には解読できるものもあるが、流行の服に関しては、ファッションへの関心が高い人から注目されている服にしか批評が行われておらず、衣服全体の分析とは言えないと考えているから。

3　ファッションに関する批評として行われる流行の服の解読は、社会集団の違いを考慮せず、「新しい」ということだけに注目して行われており、衣服の解読としては説得力に欠けると考えているから。

4　衣服から意味を読み取ろうとしても、人によって解釈が大きく異なるだけでなく、すみやかに変化していく流行現象に影響され、着ている人の意図を無視した理解に陥ってしまうと考えているから。

(キ) ――線4「豊かなコミュニケーションを成立させている」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　ファッションは同じものに複数の意味が読み出せるため、個人に合った意味を選択することができ、一人ひとりが自身の人となりを表現してコミュニケーションをとる際に役立っているということ。

2　ファッションは多様な解釈が可能であるため、社会の現状に応じて意味を捉えることができ、同じファッションが何度も新鮮なものとして人々のコミュニケーションを生じさせているということ。

3　ファッションには発信者の込めた意味を想像する余地があるため、世代の異なる人々が、歴史上のファッションについて意見を交わしあうようなコミュニケーションの機会が生まれているということ。

4　ファッションは社会情勢に従って変化し、意味を伝えることが難しいからこそ、人々がコミュニケーションをとる際に考えをめぐらせて新しい表現方法を生み出すきっかけとなっているということ。

(ク) ――線5「そういった無駄とも思える言語活動」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　テレビや出版物で広まる言語による解釈は、衣服を生産する人たちが見せかけで作ったものであり、消費されて跡形もなくなってしまうが、新しいファッションの発想が得られるという点で貴重である。

2　マスメディアが言語を用いて行う説明や批評は、ファッションの一面を切り取ったものでしかなく、時代の移り変わりとともに消えてしまうが、ファッションが社会と密接に関わるためには不可欠である。

3　マスメディアによる説明や批評は、必ず言語を用いて行われるため、ファッションにおける視覚的な情報が意味を持たなくなってしまっているが、思想や芸術や日常生活への注意喚起として有効である。

4　テレビや出版物における言語による解釈は、ファッションの意味が変化すれば不要になってしまうが、ある時代のファッションの一面に注目することにより、次の流行を作り出すためには重要である。

(ケ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　他者を理解する際にファッションが有効であることを明らかにするとともに、衣服と言語を比較することによって言語特有の性質を把握し、衣服に対して言語が果たすべき役割について論じている。

2　文字が書かれた衣服が情報伝達に役立つことを指摘し、衣服と文字が歴史的にどのような関係を作り上げてきたかを分析することで、ファッションに対するマスメディアの重要性について論じている。

3　衣服が情報伝達の手段となっている現状を踏まえ、学説を複数引用して衣服が言語としての役割を果たしきれないということを明らかにした上で、ファッションと言語の関係性について論じている。

4　情報を伝達する際に衣服が使われている事例を紹介することで、文字のように衣服が使われていることに疑問を投げかけた上で、ファッションにおける流行に惑わされない方法について論じている。

問四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

六条修理大夫顕季卿、刑部丞義光と所領を相論す。白河法皇、何となく御成敗なし。匠作心中に恨みたてまつる間、ある日ただ一人御前に祗候す。仰せられて云はく、「かの義光の不審のといかに。」と。申して云はく、「そのことに候ふ。相論の習ひ、いづれの輩も我が道理と思ふことにて候へども、

1 このことに至りては理非顕然に候ふ。未断の条術なきことに候ふなり。」と云々。また仰せられて云はく、「つらつらこのことを案ずるに、汝は件の庄一所なしといへども、全くこと欠くべからず。彼はただ一所懸命の由、これを聞こしめす。道理に任せて裁許せしむれば、子細をわきまへずして、武士もしくは腹黒を起こしたりしないだろうか）などや出来せんずらん、と思ひて猶予するなり。ただ件の所を避りてよかしと思ふなり。」と云々。

2 ここに匠作零涙に及びてかしこまり申して退出の後、義光を召して謁せしめて云はく、「かの庄のこと、つらつら思ひたまふるに、某はまた庄も少々侍り、国も侍り。貴殿は一所を頼まる、と云々。不便に侍れば、避りたてまつらんと思ふなり。」とて、不日に避文を書き、券契を取り具して、義光に与へ了んぬ。義光喜悦の色あり。座を立ちて侍所に移り居て、たちまちに二字を書きてこれを献りて退出し了んぬ。その後、殊に入り来たることなし。

（一、二年）一両年の後、匠作鳥羽殿より夜に入りて退出するに、供人なし。わづかに雑色両三人なり。作道の程

3 より冑甲を帯びたる武士ら五六騎ばかり、車の前後にあり。怖畏の情に堪へずして、雑色を以て尋ね問はしむるところ、武士ら云はく、「夜に入りて御供人なくして御退出す。よりて刑部丞殿より御送りのために以てたてまつるところなり。」と云々。ここに心中に御計らひのやむごとなきを思惟す。

（「古事談」から。）

（注）六条修理大夫顕季卿＝藤原顕季（一〇五五～一一二三）。
刑部丞義光＝源義光（一〇四五～一一二七）。
白河法皇＝白河上皇（一〇五三～一一二九）。
匠作＝ここでは、顕季のこと。
不審＝疑いをかけること。
避文＝自分の権益を放棄して他者に譲ることを示す文書。
券契＝財産の権利を示す文書。
侍所＝侍が待機する場所。
二字＝ここでは、服属の意を示すために名前を記すこと。
鳥羽殿＝現在の京都市にあった白河法皇の宮殿。
雑色＝雑用をする者。

(ア) ――線1「このことに至りては理非顕然に候ふ。」とあるが、そのように言ったときの「顕季」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「義光」との領地の争いについては正否がわかりきっているにもかかわらず、「白河法皇」にはっきりと判断してもらえないことを不満に思っている。

2 領地に関する言いがかりとも受け取れる「義光」の訴えに対して、いっこうに厳しい罰を与えようとしない「白河法皇」の態度を情けなく感じている。

3 領地が「義光」のものではないと判断するのは難しくないはずなのに、「白河法皇」に何度も呼び出されて説明を求められることを煩わしく思っている。

4 「義光」とともに領地の所有者についての意見を求めているにもかかわらず、全く相談に応じるそぶりを見せない「白河法皇」の様子に失望している。

(イ) ――線2「ここに匠作零涙に及びて」とあるが、そのときの「顕季」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自分が領地を所有することの正当性について主張し続けたせいで、「白河法皇」の怒りを買ってしまい、結果的に領地を手放すはめになってしまったことにやり切れない思いを抱いている。

2 「白河法皇」が自分の主張の正しさを認めてくれた上、武士の怒りを買う可能性があることを踏まえ、安全を考慮して判断をためらっていたことを知って恐れ多い気持ちになっている。

3 自分のようにたくさんの領地を持っていないために「義光」がつらい思いをしていることを、「白河法皇」が哀れんで、自分に領地を手放してやるよう勧めたのだと知って感動している。

4 「白河法皇」が武士を恐れるあまり「義光」の味方になってしまったせいで、自分の領地が奪われたことに加え、所有を主張する訴えまで強制的に取り下げられてしまい悲しんでいる。

(ウ) ――線3「冑甲を帯びたる武士ら五六騎ばかり、車の前後にあり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「顕季」が領地を譲ってくれたことに歓喜した「義光」は、領地を失ったばかりか家来まで手薄になってしまった「顕季」を部下に命じて警護させたということ。

2 「顕季」との領地争いに勝利したことで気をよくした「義光」は、「顕季」に自身の威勢のよさを知らしめるため意気揚々と部下たちを登場させたということ。

3 「顕季」が領地の一部を失ってしまって気落ちしていることに同情した「義光」は、部下に命じて「顕季」に対する恩に報いる機会を探らせていたということ。

4 「顕季」が気前よく領地を譲り渡してくれたことに感謝した「義光」は、「顕季」の身に危険が及ばないよう部下に命じてひそかに見守らせていたということ。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「義光」は領地に執着する一方、武士として忠義を貫く人物であり、家来として誠実に尽くす姿を見た「顕季」は、領地を譲ることを自ら「白河法皇」に願い出た自分の判断の正しさを確信した。

2 「顕季」は駆けつけた武士たちから話を聞いて、「義光」には武士として領地を守る性質の他に、他者の命を重んじる一面もあることを知り、不服だった「白河法皇」の裁決にようやく納得した。

3 「顕季」は領地を手放してしばらくたってから、不意に現れた勇ましい冑甲姿の武士たちを目の前にして、「義光」の武士としての側面を初めて実感し、「白河法皇」の配慮の的確さに感服した。

4 「義光」は武士として、領地に対する強い思いを持った人物であり、「顕季」から与えられた領地を命がけで守ろうとする様子を見た「白河法皇」は、武士としての心意気を感じて褒めたたえた。

問五　中学生のAさんは、「AIとの関わり方」について考えるために、二つの文章を読んでいる。次の【文章1】、【文章2】は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

【文章1】

先日、ある会合で、情報関係の研究者の話を聴いた。その人は、情報技術が人間の能力に取って代わるのではなく、人間が自分で何かを達成するのを助ける働きをするべきだと考えを変えたそうだ。掃除も洗濯も機械でできます、ロボットがご注文を承ります、配達もします、お勧めメニューもお見せします、ではなく、ある人が何をしたいか、それをその人が自分で達成するにはどんな手助けをしたらよいかという観点から考えたいということだ。

つまり、技術の発明や改良を考えるのが楽しい研究者の側から何ができるかを追求していくだけではなく、人々が幸せで充実感のある生活を送ることを大目標とする。そして、その目標を達成するためには、AI、ロボット、情報技術がどのように役立てられるかを考えるのである。たとえば、テニスが上手になりたいと思う人には、自分で実際に上達するように仕向けるアプリを提供する。目標は本人が上達することであって、バーチャルリアリティの世界でテニスをすることではない。

昔から発明、改良されてきたさまざまな技術の多くは、人間の肉体的な重労働を軽減するものだった。それにもいろいろな副産物があるのだが、これからの技術には、人間が幸せに暮らすとはどういうことかをまずは検討し、その実現のためには何をするべきかについて、より深く考える必要があるのだろう。

（長谷川（はせがわ）　眞理子（まりこ）「ヒトの原点を考える」から。一部表記を改めたところがある。）

【文章2】

AIのご託宣に従っているときは、自分は何も失っていないような気がするわけですよ。読みたくないものを読めと言われているわけでもないし、戦時中のように思想統制があって、これは読んではいけない、と禁じられているわけでもない。むしろ、これを読んだらどうでしょう、とレコメンド(注)され、エンカレッジされている。何も失うものはなく、いいことずくめ。便利に見えます。

でも、ここで奪われているのは、人間の「無意識」だと思うんです。心の内面の意識されている自由が失われているのではなく、無意識の次元にある自由が毀損され、奪われている。

それは「偶有性」と言えるかもしれません。つまり、「他でもあり得た」ということ。他でもあり得たけれど、いまこれをやっている。それの何が重要なの？　と思うかもしれません。でも、「他でもあり得た」ことが留保されていることがすごく重要で、これがあるから人間って自由なんですよ。「他でもあり得た」というときのその「他」は不確実なものです。しかしレコメンドされると、その「他でもあり得た」未知数の部分が埋められ、最初から、なかったものとされてしまいます。「他の本でもあり得たけど、私はこの本を欲（ほっ）した。」と思って入手するのと、「あなたの欲しいのはこの本ですよ。」とAIから教えてもらって飛びつくのは、大違いなんです。

つまり、人間は何か行動をするとき、それが自由であるためには、「他でもあり得たんだけど、これをやった。」と言えなければいけない。この「他でもあり得た」部分が確保されているから自由なのです。AIからレコメンドされて、それに流されてしまうから自由が失われたのではなく、人間が持っている「偶有性」が失われるからこそ、自由が奪われている。

（大澤（おおさわ）　真幸（まさち）「無意識が奪われている」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）レコメンド＝勧めること。
エンカレッジ＝促すこと。

(ア) Aさんは【文章1】と【文章2】を読んで、内容を次のようにまとめた。【Aさんのメモ】中の［Ⅰ］・［Ⅱ］に入れる語句の組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

【Aさんのメモ】

【文章1】
ある情報関係の研究者は、
「情報技術が人間の能力に取って代わる」
・掃除も洗濯も機械でできる。
・ロボットが、注文を聞いたり配達したり
お勧めのメニューを見せてくれたりする。
という考えを、
「研究者は［Ⅰ］だけでなく
人々の幸せで充実した暮らしを大目標にして
技術の発明や改良を行うべきだ」
という考えに変えた。

【文章2】
読む本を選ぶとき、AIからのレコメンドや
エンカレッジは便利に見える。
しかし、
無意識の次元にある自由は奪われている。
AIに流されたせいではない。
つまり、
人間は、行動するとき［Ⅱ］が失われない
ようにする必要がある
ということ。

関係があるのではないか。

1　Ⅰ　自分の知的好奇心を満足させる　　Ⅱ　選択が正しいと思える状態
2　Ⅰ　人間が働かずに生活する方法を考える　　Ⅱ　何を選ぶか自分で決められる状態
3　Ⅰ　技術の進歩の可能性を追求する　　Ⅱ　他を選ぶ可能性がある状態
4　Ⅰ　人間の肉体的な重労働の軽減を目指す　　Ⅱ　選ぶべきものを教えてもらえる状態

(イ) Aさんは【文章1】と【文章2】を読んで考えたことを次のようにまとめた。【Aさんのまとめ】中の［　　］に適することばを、あとの①～④の条件を満たして書きなさい。

【Aさんのまとめ】

【文章1】を読んで、情報関係の研究者の考えを知ることができた。研究者が発明や改良を行った情報技術を使う立場にある私たちは、行動の主体はあくまでも人間であるという意識を持ち、自分で何かを達成するべきだ。そうすることで、充実感を得られ、幸せに暮らすことができると思った。

また、【文章1】を読んで、【文章1】と【文章2】は関係があるのではないかと思った。幸せに暮らすためには自由であることも欠かせないと思うからだ。【文章2】によると、AIからの勧めに従って行動するとき、人間の無意識の次元にある自由は奪われてしまっている。

以上のことを踏まえて考えると、AIなどの情報技術を、［　　］ように使うことを心がけるべきだ。そうすれば、充実感を得られるとともに自由も守られ、幸せに暮らすことができるのではないだろうか。今後は、AIをうまく活用している事例や別の研究者の考えについて調べてみたい。

① 書き出しの［AIなどの情報技術を、］という語句に続けて書き、文末の［ように使うことを心がけるべきだ。］という語句につながる一文となるように書くこと。
② 書き出しと文末の語句の間の文字数が二十五字以上三十五字以内となるように書くこと。
③ 【文章1】と【文章2】の内容に触れていること。
④ 「手助け」「偶有性」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

（問題は、これで終わりです。）